

# 会話における質問の働きと 日本人英語学習者の相互行為能力

## Initiating and Developing Conversation with Questions: An Analysis of Interactional Competence of Japanese Learners of English

早野 薫

### Synopsis

While interactional competence in a native language is acquired effortlessly, developing interactional competence in a foreign language may require explicit teaching and learning. Indeed, many Japanese learners of English find it challenging to participate in and contribute to spontaneous conversation. This paper is aimed at exploring the possibility of applying conversation analytic insights into the development of interactional competence of Japanese learners of English. The focus is on the use of questions as a resource to initiate and develop talk in interaction, i.e., topic proffers, news receipts or newsmarks and topic pursuits. The paper first documents how questions are formulated and employed to achieve these actions in conversation between native speakers of English. It then illustrates how Japanese learners of English manage the same interactional tasks by analyzing conversational data. It is reported that while Japanese learners of English in the corpus are able to proffer topics with questions, they appear to experience more difficulty in receipting an interlocutor's answers and developing the exchange on the topic while building cohesion across turns. The findings are discussed to explore possible benefits of explicit instructions of interactional strategies based on conversation analytic studies on naturally-occurring conversation.

**Keywords:** *interactional competence, Japanese learners of English, conversation analysis, question*

### 1. はじめに

他者と会話をするということは、言語を習得してさえいれば出来て当然のことと考えられてきた。しかしながら、私たちが日々、様々な相手と様々な場面で行なう平凡な会話は、参加者ひとりひとりが規則にしたがって順番交替をし、問題が発生した際には規則立った、合理的なやり方で修復し、発話の連なりが構成する組織を参照しながら発話を産出、理解し、やりとりを展開させていくことによって初めて成り立っている。私たちが他者とのコミュニケーションに参加し会話を成立させる能力、「相互行為能力」(Heritage and Atkinson, 1984) は、このような側面を全て含み持つ、複雑な会話活動を行なう能力なのである。

私たちが母語で会話をしている際は、相互行為の成立に関わるこれらの諸側面が私たちの意識に上ることはほとんどなく、むしろ、話の内容に意識が向かっているという感覚を持つだろう。また、ディベート

をする、プレゼンテーションをするなどの活動は、言語使用の中でも特殊な技術を必要とするものであり、通常、ある程度の訓練を要するジャンルであるのに対し、日常会話は、特別な訓練を積まなくても誰でも自然に出来るようになる。ところが、そこで使用される言語が外国語となると、平凡な会話をするということは簡単なことではなくなる。とくに日本人英語学習者の中には、スムーズに会話をするということ、ディベートをしたりプレゼンテーションをしたりすることよりもむしろ難しいことであると感じる人が少なくないだろう。英語での会話の中でテンポ良く順番をとり、相手の発話を受け止めながら自分も積極的に会話に参加し、やりとりを進める、ということは、文法力やリスニング力があれば自然にできるようになるわけでは、必ずしもない。その要因のひとつとして、母語では無意識に行なっている会話進行に関わる様々なふるまいを、英語ではどう実践するのかをしっかりと学習する機会が不足している、ということが考えられるのではないか。本稿では、日本人英語学習者の相互行為能力について検討するためのひとつの手がかりとして、相互行為能力に関わる会話分析の知見を応用する可能性を議論する。とくに、会話の展開、継続に関わる質問発話の使用に着目し、英語母語話者間の会話の中で質問発話がどのように運用されているか、それに対して日本人英語学習者の場合はどうであるかを会話分析の分析枠組みを使用して対比する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2節では会話分析の手法とそれによってもたらされた知見、また、それが外国語教育に対して持つ示唆について、先行研究を概観する。次に、3節では、会話において質問発話をする働きについて、先行研究の知見を簡単にまとめ、その中でも本稿が分析の対象とする質問発話を特定する。続いて4節では、そこで特定したタイプの質問発話（話題提供質問、ニュース標識質問、話題展開質問）が、英語母語話者による会話においてはどのような形式で現れているのかを示す。そして、5節では、同じコンテキストで日本人英語学習者がどのようにふるまっているのかを記述する。6節では分析の結果をまとめ、今後の展望、課題について議論する。

## 2. 会話分析の手法と英語教育への応用

会話分析は、1960年代の終わりから1970年代にかけて、アメリカの社会学者、ハーヴィー・サックス、エマニュエル・シェグロフ、ゲイル・ジェファソンらを中心に提案された研究領域である。その特色は、人と人とが言語的、非言語的なコミュニケーション資源を用いて行なうやりとり、社会的相互行為 ("social interaction"、以下では「社会的」を省略して「相互行為」とする) を分析し、そうすることにより社会の成員が社会的秩序を構築、再構築、維持する仕組みをミクロのレベルで記述しようとするところにある。具体的な手法としては、実際の自然会話を録音または録画し、それを細部まで文字化し、そこで起きていることを緻密に分析する。その際、研究者の先入観に捕われること、また、一般化、理論化を急ぐことを避け、あくまでも経験的に、データに内在する証拠を積み上げ、そうすることで会話に参加している当人たちにとって意味を持つ ("relevant") 相互行為の規則や組織を明らかにしようとするのが、会話分析の取り組みである。その中心的な成果としては、会話の中で、沈黙や重なりを生じさせることなく発話の順番交替をすることを可能にするシステム (Sacks, Schegloff and Jefferson, 1974)、発話、聞き取り、あるいは理解上の問題が起きた際に、それを合理的に「修復」するための仕組み (Schegloff, Jefferson and Sacks, 1977) や、個々の発話が、その文法的な組み立てだけではなく、発話の連なり (「連鎖構造」) の中で占める位置との関わりの中で何らかの「行為」を成し遂げる、そのメカニズムの記述 (Schegloff, 2007; Schegloff and Sacks, 1973) などが挙げられる。これらの知見の集積により、相互行為の仕組み、そして相互行為の中で適切にふるまう相互行為能力がどのようなものなのかが、徐々に明らかにされてきたのである。

最近になって、このような会話分析の知見を外国語教育研究や外国語教授法に応用する取り組みも盛んになってきている (Barraja-Rohan, 2011; 細田, 2008; Koshik, 2005, 2010; Schegloff 他, 2002; Wong and Waring, 2010 など)。前述したように、母語での会話において会話参加者の意識が順番交替の規則や修復の組織に向けられることはほとんどない。しかしながら、外国語での相互行為において「無意識的に」、スムーズに会話に参加することができないとき、相互行為能力に関わる明示的な指導が効果的であると考えられる動きがある (Barraja-Rohan, 2011; Kasper, 2006 など)。また、Schegloff 他 (2002) は、教材として教科書執筆者が直感を頼りに創作したダイアログを使用するのではなく、実際に起きた自然会話をもとにしたダイアログを使用することが有益である可能性を指摘している。具体的な教授法には様々な形態が考えられるが、少なくとも、相互行為上のふるまいに関する学習者の意識 ("awareness") をなんらかの形で高めることは有効であると考えられる。本稿では、会話分析の知見を日本人英語学習者の相互行為能力育成に応用する試みのひとつのステップとして、英語母語話者の質問発話の使用と日本人英語学習者のそれを会話分析的な視点から比較する。

### 3. 会話における質問発話の働き

前節で述べたように、会話の成立には、様々な規則、仕組みが関わっている。発話の「連鎖組織」は、そのひとつである。ひとりひとりの話者が、それぞれ好き勝手に発話をしていただのでは、意味のある会話は成立しない。そうではなく、それぞれが産出する発話が、意味、一貫性のある連なりになっていなければならない。そのようなやりとりを成立させるのが連鎖組織である。その中でももっとも基本的なものが「隣接応答ペア ("adjacency pair")」 (Schegloff and Sacks, 1973) である。実際、会話の中で産出される発話のほとんどが、隣接応答ペアを成す形で他の発話と結びついている。隣接応答ペアは、2人の話し手によって産出される、前後する2つの順番 (第一成分と第二成分) から成り、そしてその2つの順番は、同一の「ペアタイプ」に属するものである。たとえば、ある話し手がある相手に向けて挨拶を投げかけ (第一成分)、その相手が挨拶を返した場合 (第二成分)、それは「挨拶ペア」を構成するし、ある話し手が「依頼」をし (第一成分)、相手はその依頼を「受け入れ」れば (第二成分)、それは「依頼-受け入れペア (あるいは依頼ペア、依頼連鎖とも呼ばれる)」を構成する (Schegloff, 2007; Schegloff and Sacks, 1973)。複数の発話がこのようにしてたがいに結びついていくことによって、意味あるやりとりが成立するのである。

本稿で注目するのは、隣接応答ペアの第一成分として会話の中で非常に重要かつ多様な働きをする、質問発話である。(文法、イントネーション、あるいはその他の慣習化されたやり方によって産出される) 質問は、なんらかの情報を要求するという働き以外にも、依頼、提案、申し出、苦情、非難、など、実に様々な行為を行なう際に使用される形式である (Brown and Levinson, 1987; Steensig and Drew, 2008; Hayano, 2012; Stivers, 2010 など)。本稿では、その中でも、とくに英語教育の中でとりあげられることが少なく、また、日本人英語学習者が困難に感じることが多いものと考えられる、会話の進行、促進、継続に関わる質問発話に注目する。Couper-Kuhlen (2012) は、そのような働きをする行為として (1) 相手の方がよく知る話題について、その相手に質問を投げかけることにより、その話題についての相手の話を引き出す「話題提供 ("topic proffer")」 (Schegloff, 2007: 169-180)、(2) 一旦会話に導入された話題をさらに展開させる「話題展開 ("topic follow-ups and pursuit")」、(3) 相手が直前に述べたことをニュースとして受けとめる「ニュース受けとめ (news receipt) / ニュース標識 ("newsmark")」 (Heritage, 1984; Jefferson, 1981; Maynard, 2003)、そして (4) 修復の他者開始 (Schegloff 他, 1977) の4つをとりあげ、それぞれどのような質問形式をとるか、どのようなイントネーションで産出されるのかを分析している。以下では、この中でもとくに会話の進行、促進に関わる (1) 話題提供、(2) 話題展開、(3) ニュー

ス標識に焦点をしばり、英語母語話者どうしの会話においてこれらの行為を行なう上で質問がどのように産出されているのかを報告し、それを同様のコンテキストにおける日本人英語学習者のふるまいと対比していく。

#### 4. 英語母語話者による質問発話と会話の展開

まず、先行研究で論じられている実際の会話からの引用事例を参照しながら、英語母語話者どうしの会話においてやりとりがどのように開始、展開、継続しているのか、そこで質問発話がどのような働きをしているのかを確認したい。

事例 (1) では、前述の3つのタイプの質問 (話題提供、話題展開、ニュース受け止め/ニュース標識) を観察することができる。これは、ピクニックパーティでの会話からの抜粋で、Curt と Mike は、他の参加者も交え、Mike がその前夜に観に行ってきたカーレースについて話をしている。(文字化表記法については文末の付録を参照されたい。)

(1) [Schegloff, 2007: 178]

- 1 Curt: → (W'll) how wz the races las'night.  
2 (0.8)  
3 ???? : (Ha-[u h] )=  
4 Curt: → [Who w'n ] [th' feature.]  
5 Mike: = [Al won, ]  
6 (0.3)  
7 Curt: [(Who) ]=  
8 Mike: [Al. ]=  
9 Curt: → =Al did?  
10 Curt: → Dz he go out there pretty regular?,  
11 (1.5)  
12 Mike: Generally evry Saturdee.

まず、1行目のCurtによる質問 ("Well, how was the races last night?") は、前夜のカーレースという話題を持ち出し、この話題について相手が話をする機会を作っている (話題提供)。この質問に対してMikeがすぐに応答しないことを受け、Curtはより具体的な質問をして ("Who won the feature?") Mikeからの応答を促す。MikeはCurtの質問と重なりながらAlという人物が勝ったと答える (5行目)。Curtはこの答えを聞き取ることができなかつたのか、0.3秒の間の後で (6行目)、Mikeに問い返している (7行目)。それと同時に、Mikeが答えを繰り返している (8行目)。これで、4行目のCurtに対する答えが与えられ、質問—応答というひとつの隣接応答ペアが収束し得る地点に至る。

しかし、やりとりはここで区切れるのではなく、さらに展開している。その展開のきっかけを作っているのが、9行目のCurtの、"Al did?" という聞き返し (ニュース受け止め) だろう。聞き返すことによって、Curtはその前のMikeの発話をニュース性のあるものとして受け止め、この話題についてのやりとりが継続する可能性を残している<sup>1</sup>。Curtはさらに "Does he go out there pretty regular?" と、より具体的に話の方向を特定するような形で、この話題に関するやりとりを拡張させる質問 (話題展開) をしている (10行目)。実際、Mikeはこの質問に答え (12行目)、このやりとりはさらに展開していく。

事例 (2) でも、同様の形で質問発話が会話の展開に貢献している。これは Coupler-Kuhlen (2012) によって論じられた事例で、ラジオ番組の司会者 (Don) と番組に参加するために電話をかけてきた視聴者 (Nathan) とのやりとりからの抜粋である。

(2) [Couper-Kuhlen, 2012: 135-136] (文字化表記上、若干の修正を加えた。)

- 10 Don: → what do you do in life. nathan?  
11 Nat: er I sell life insurance  
12 Don: → do you really.  
13 Nat: yes I do.  
14 Don: → difficult job for you?  
15 Nat: it's er it's hard the business is there  
16 Don: m [m  
17 Nat: [- [-  
18 Don: → [the- the recession (.)  
19 → does the recession help?  
20 Nat: well I was just going to say that (.)  
21 there isn't erm (.) er  
22 people disagree with this  
23 if I say there's not a recession o[n?,

このやりとりは、Nathan の職業を話題として、次のような構成で展開している。まず、10 行目で Don が話題提供をする質問をし ("What do you do in life, Nathan?"), それに Nathan が端的に答える ("I sell life insurance.")。この話題についてのやりとりは、この質問—応答連鎖だけで閉じてしまうのではなく、Don によるニュース標識質問 ("Do you really?") によってさらに拡張、展開していく機会を得る (12 行目)。Nathan は、この質問にも端的に答えるだけであるが ("Yes I do.") (13 行目)、Don が話題の展開を促す質問をすることによって ("(Is that a) difficult job for you?", "Does the recession help?"), Nathan がより詳しく自分の仕事について語る機会がもたらされ、実際、やりとりはそのように展開している。このように、質問発話は、話題提供、ニュース受けとめ／ニュース標識、話題展開と、やりとりを開始し、それを展開させていく上で重要な働きをしている。

次に、質問発話の形式について観察できることを挙げておきたい。事例 (1)、(2) で例示されているように、これらの行為を行なう質問発話は、それぞれに特徴的な形で組み立てられている。まず、話題提供質問は ("What do you do in life, Nathan?", "Well, how was the races last night?"), 省略や代動詞などを含まず、文法的に完全な、独立した質問文の形をとっている。一方、ニュース標識質問 ("Al did?", "Do you really?") は、省略や代動詞を用いて切り詰められた形をとっている (be 動詞文に後続する場合には "Are you?" などの形をとる)。また、"Oh really?" など、驚きを示すような聞き返し発話も、英語でニュース標識として多用される形式である (Jefferson, 1981; Heritage, 1984)。一方、話題展開質問は、文法的には切り詰められた形になっていないように見える ("Does he go out there pretty regular?", "(Is that a) difficult job for you?", "Does the recession help?")。しかしながら、代名詞などの前方照応表現 ("he", "there") が使用されていたり、文の一部が省略されていたり ("(Is that a) difficult job for you?" の "(Is that a)" の部分は省略されている)、あるいは質問の前のやりとりを参照しないと質問の内容が理解できない形になっている ("Does the recession help?" において、景気後退が「何を」助長すると質問しているのかを理

解するためには、そのまえのやりとりを参照する必要がある)、など、それまでのやりとりをふまえて、それに関わるものとして理解できるような形で組み立てられているとすることができる。このように、話題提供発話がそれ以前のやりとりに依存しない、独立した形で組み立てられているのに対して、ニュース受け止め／ニュース標識や話題展開を担う質問は、話題提供発話をきっかけとしたやりとりに依存し、それをひきつぐ形式をとっている。この形式は、それぞれの発話が連鎖構造において占める位置、そこで果たす機能と呼応しており、会話における一貫性、結束性 (Halliday and Hasan, 1976) をつくりだし、話題の継続、展開を達成していると言っていることができるだろう。

## 5. 日本人英語学習者の質問の使用

前節では、英語母語話者どうしによる会話からの事例をとりあげ、そこでのやりとりの開始と展開の中で質問が果たす役割について議論した。話題を導入しやりとりを開始する際にはそれまでのやりとりに依存しない、完全な形式での質問がなされ、そのやりとりを継続、展開させていく働きをする質問は、話題提供質問からのやりとりに依存し、それを引き継ぐような形式がとられる。これをふまえ、本節では、日本人英語学習者が同様の場面でどのような発話行動を行なっているのかを分析する。

本稿で検討するデータは、日本語を母語とする大学院生が参加する英会話を録画あるいは録音したものである。2ヶ月以上の海外在住歴を持たない、日本で英語教育を受けた大学院生3名がデータ収録に参加した。そのうち1人は、英語を第二言語とする英会話パートナーとインターネット電話で、他の2人は、日本語を母語とする大学英語教員と対面して、それぞれに英会話レッスンに参加してもらった。事前に、以下の2点を指示した。

- ・相手のことを知るために、会話相手にインタビューをする。質問の内容は自由。
- ・ただし、その際、会話が途切れ途切れにならないよう、できるだけ自然に会話をつなげるように心がける。

このデータは完全な自然会話ではないが、このような指示を与えることで、箇条書きのように質問を投げかけるのではなく、話題を展開させながら会話をつなげる努力を引き出すことをねらいとした。3組の会話から、合計約45分の会話データが得られた。以下では、このデータベースからの事例を引用しながら、日本人英語学習者の会話において質問発話がどのように使用されているのか、そのパターンを記述することを試みる。

### 5.1. 日本人英語学習者による話題提供質問

まず、日本人英語学習者による話題提供質問を例示する。前節で見たように、英語母語話者が産出する話題提供発話は、文法的に独立した、完全な質問文として組み立てられている。日本人英語学習者が産出する話題提供発話も、同じように、文法的に省略や代名詞表現を含まない、独立した文の形をとる。(これ以降、“LN” は日本人英語学習者を、“IE” はインタビューの受け手役をつとめた会話相手をそれぞれ指す。)

(3) [EngConv\_J2]

LN: so what do you do. (0.4) in Japan?

(4) [EngConv\_J2]

LN: wha- what do you like in:: wha-what do you- wha- what do you like  
to do in:: in your future?,

(5) [EngConv\_J1]

LN: what kind of s- (0.4) study:: you:: did.

これらの話題提供質問は、質問の内容を相手に伝え、相手からの答えを引き出してやりとりを開始する上で、問題なくその役割を果たすものと思われる。

事例 (3)、(4)、(5) はすべて、いわゆる wh 疑問文で組み立てられているが、そうでない場合もある。事例 (6) では、疑問文を用いず、"I'd like to know..." という平叙文を用いた依頼の形で話題提供がなされている。

(6) [EngConv\_J3]

- 1 LN: so I:: li-like to- (0.2) ah start my question for you?, .hhh
- 2 an:: so:: I:: (0.2) firstly I'd like to ask y- .hh (0.2) ask you:: .hh
- 3 a:::- ask you to:- (0.2) explain- .h about your::: current job at
- 4 university?, I'd like to know- <what kind of> jobs you do:, usually
- 5 i(h)n[the:: university.
- 6 IE: [okay,

このような依頼の形を用いた話題提供は、話し手自身の疑問（関心と言うこともできるかもしれない）を提示する質問文発話でなされる話題提供と比較すると、よりフォーマルで礼儀正しい印象を与えるかもしれない。また、この学習者は "Firstly, I'd like to ask..." という表現を用いることで、今自分が行なおうとしている質問が、複数準備されている質問のうちの1つ目である可能性を示唆している。そのような形でやりとりを開始することも、この会話がフォーマルな、予め準備されたものであるかのような印象を相手に与えるだろう。このような話題提供の仕方は非常に丁寧であり、本研究のデータ収集のために設定した「インタビューをする」という場面に適していると言えるかもしれない。ただ、これを実際の自然会話で使用した場合には、互いにやりとりをする中で自由に会話を展開させていくことを妨げてしまう可能性もあるだろう。

## 5.2. 日本人英語学習者によるニュース受けとめ／ニュース標識質問

次に、話題提供によって話題が持ち出され、相手がなんらかの応答をしたその後で、日本人英語学習者がどのように相手の発話を受けとめているのか見てみたい。本稿で検討したデータの中では、英語母語話者が使用しているような形式でのニュース受けとめ／ニュース標識質問は観察されなかったが、それでも、なんらかの手段で前のやりとりをふまえ、それを発展させる形で会話を継続しようとする試みがなされていた。

事例 (7) は、前の発話を受けとめるような発話が産出されていない例である。ここでは、1行目でLNによって話題提供質問がなされ、その質問に対するIEの答えが続く(2～4行目)。この答えが産出されている間、日本人英語学習者はあいづちをうって(5行目)相手の話を聞き止めていることを示し、また、4行目で答えが完了する際にも小さな声で聞きとめることをしているが、答えをニュース標識によって受

けとめることはしておらず、そのまま次の質問に移っている (7行目)。

(7) [EngConv\_J2]

- 1 LN: so what do you do. (0.4) in Japan?
- 2 IE: what do I do in Japan. I teach English to college students?,
- 3 .hh while I do research
- 4 on ((*area of* [study])). so I do research and teaching. ( [ ] ).
- 5 LN: [mm-hm, [°hm°
- 6 (0.4)
- 7 LN: what- what's the subject do you: (0.4) do research.

5行目のLNのあいづちは、相手のIEの発話を聞きとめたということは表すが、それを自分がどのように受けとめたのかを示したり、次のやりとりにつなげる働きをしたりはしていない。また、LNの7行目の質問は、内容的には、1行目の質問によって得られたIEの答えを受け、その中の一部を取り上げて展開させるもので、やりとりを発展させる働きをしている。しかしながら、発話の形式としては、LNが2行目から4行目にかけての相手の応答に依存した形になっておらず、独立した「次の質問」に進んだという組み立て方になっている。

これに対して次の例では、LNの質問に対する相手の答えが完了してから次の質問(話題展開質問)に移る際、まずは"thank you,"と言って相手の答えを受け止め、そして、"so you said that you are doing counseling to the students,"と、相手の答えの一部を繰り返している。そうすることによって、これから自分がしようとしている質問が、相手の答えを受け、その一部をさらに掘り下げていくものであることを予示している。

(8) [EngConv\_J3]

- 1 IE: that's what I do at this university.
- 2 (0.2)
- 3 LN: → a- thank you, so::: .hh so you said that you:: are:: s
- 4 → doing counseling to the students and the .h so th- a:
- 5 is it a::: only at- this- university?=or::: .hh
- 6 you do- th- tho:::s::: counselings in both universities
- 7 at { } university.

感謝の言葉と相手の答えの部分的な繰り返しを挟むことで、このLNは、IEの応答を自分がきちんと聞いて受けとめたということ、また、次に自分が行なう質問が、これまでに行なわれた質問-応答連鎖と無関係ではなく、それをさらに展開させるものであるということを伝えている。その点で、会話における結束性をつくることができていると言えるだろう。ただ、相手の応答を感謝の言葉で受けとめる、相手の答えの一部を"You said..."という形で繰り返し次の質問につなげる、などの手法は、フォーマルなインタビューや、その他の特殊なコンテキストで使用されるものであり、カジュアルな日常会話では使用しにくいものであることが想像される。

一方、次の事例では、英語母語話者間のやりとりで表われるニュース標識発話に見られるような、「切り詰められた」形の質問が使用されており、それが、話題の展開のきっかけを作っているように見える。



事例 (9) では、LN に促されて IE がどのような学歴を持っているかを語っている。LN はあいづちをうちながら相手の話を受けとめている (3 行目、6 行目、9 行目)。IE が 7 行目で、交換留学生としてアメリカに行った経験について述べたときも、一旦はそれをあいづちで受け止め続きを促すが (9 行目)、11 行目で IE がその発話を拡張し始めたところで (11 行目)、"Pardon." と相手の話を止め、"You went to U.S.?" と聞き返している (13 行目)。

(9) [EngConv\_J1]

- 1 IE: yes and my parents (.) wanted me to get a good education?, (1.0) so  
2 I finished- (0.2) upto a college degree?, (0.2) .hh in: [:: a university=  
3 LN: [uh-huh?  
4 IE: in(a) Manila?,  
5 (1.4)  
6 LN: mm-hm,=  
7 IE: =and I was also a exchange student in the U.S.?  
8 (0.2)  
9 LN: mm hm?  
10 (0.2)  
11 IE: when I was in the:: [:: senior highschool.  
12 LN: → [a p- p-pa-  
13 LN: → >pardon.< .h (0.2) y- you went to:- (0.2) U.S.?  
14 (0.5)  
15 IE: yes, I went to:: the U.S. in ( ),  
16 LN: wha- how [old-  
17 IE: [a- as an exchange student,  
18 (0.2)  
19 LN: how old you ar- how old you:: [:  
20 IE: [I was- I: was:: seventeen at that time?

13 行目の、LN による "You went to U.S.?" という質問は、産出のタイミングが遅れてはいるものの、相手の発話の一部を切り取り、それをニュース価値のあるものとして扱い、相手がそのことについてさらに話す機会を作っている。ここでは、英語母語話者が産出するニュース標識のように代動詞は使用されていないが (4 節参照)、この発話によって取り上げているのが、IE の直前の発話ではなく、7 行目まで遡っていることを考えるならば、むしろ自然なことだと考えることができる。それでも、7 行目の IE の発話をすべて繰り返すのではなく、短く切り詰められた形を使用することで、相手の発話の一部を切り取り、ニュース性があるものとして扱っているという印象を与えている。実際、IE は、この質問の後、アメリカ留学について詳述を始め、話題が展開している。

このように、日本人英語学習者による会話においても、相手の発話をニュース性のあるものとして受け止め、相手がそのことについてさらに話を展開する機会をもたらしような質問は産出されている。しかし、本稿で使用したデータを見た限りでは、そこで使用されている質問の形式は英語母語話者が使用する形式とは異なっていたり、また、産出のタイミングが遅れたりしているということが観察された。

### 5.3. 日本人英語学習者による話題展開質問

最後に、先行する質問－応答連鎖をふまえ、そこでのやりとりをさらに発展させていくことを促す話題展開質問を見てみよう。前述したように、英語母語話者会話に見られる話題展開質問は、先行するやりとりの続きとして聞こえるように組み立てられていた。日本人英語学習者の会話データに見られる話題展開質問にも、同じように、まったく新しい話題を持ち出す質問としてではなく、それまでのやりとりをふまえ、それを展開させる形式をとるものがあった。たとえば、先に見た事例(8)では、LNは4行目から7行目にかけて "So, is it only at this university? Or you do those counselings in both universities at { } university." と質問していた。ここで、"it" という代名詞、および "those counselings" という前方照応表現を用いることで、この質問が先行するやりとりの続きであることが表されており、複数の発話連鎖から成るやりとりを通しての結束性が築かれている。

それに対し、事例(7)(下に事例10として再掲)で産出されていた話題展開質問は、内容的には先行するやりとりを掘り下げるものであるが、形式としては独立している。

#### (10) [EngConv\_J2] (再掲)

1 LN: so what do you do. (0.4) in Japan?

----- (中略) -----

4 IE: ...so I do research and teaching. ( [ ] ).

5 LN: [°hm°

6 (0.4)

7 LN: → what- what's the subject do you: (0.4) do research.

この質問は、最初の質問に対するIEの答えを受け、それをさらに掘り下げようとするものになっている。しかしながら、質問の形式としては独立した形になっており、先行するやりとりに依存した形にはなっていない。しかしながら、この場合、IEが「研究とティーチングをしている」と答えているため、何を教えているかではなく、何を研究しているのか、と限定して質問するには、このLNが行なおうとしているように、形式的に切り詰めた、先行するやりとりに依存する質問として組み立てることは考えにくいかもしれない。このように、話題展開質問発話自体で結束性を築くことが難しい場合こそ、ニュース標識を挟んでおくことによって、その前に話された話題がまだ収束していないこと、それを継続しようとしていることを示しておくことが、やりとりをスムーズに展開させていく上で有効になるだろう。

最後に、事例(9)に見られた話題展開質問についても分析しておきたい。このやりとりは、IEがアメリカに留学した経験に言及した際、それに対してLNがニュース標識質問を産出したことによって展開してきたものである。15行目でIEがアメリカに留学していたことが確認されると、その直後にLNは、何歳のときに留学していたのかを尋ねる話題展開質問をしようとする(16行目)。しかし、これは15行目の発話をさらに拡張したIEの17行目と重複する。そこで、LNは19行目で再びこの質問を試みている。

(11) [EngConv\_J2] (事例 9 より一部再掲)

- 15 IE: yes, I went to::: the U.S. in ( ),  
16 LN: wha- how [old-  
17 IE: [a- as an exchange student,  
18 (0.2)  
19 LN: how old you ar- how old you::: [:  
20 IE: [I was- I: was::: seventeen at that time?

LN の 19 行目の質問は、過去時制が使用されていないため、コンテキストから切り離して形式だけを見たのでは、IE の留学当時の年齢を聞いているということは特定されない。しかしながら、be 動詞の現在時制 "are" を産出し始めて途中で取やめてとりやめていること ("ar-") と、また、15 行目で IE がアメリカに留学していたことが確認された直後に産出されかけた質問であることから、留学当時の年齢を尋ねているものであると理解することが可能である。つまり、形式上は結束性をマークする形にはなっていないが、質問がなされたタイミングと言いつつ直しから、この質問が、前のやりとりから切り離されたものではないということが分かるようになってきているのである。そして、IE は、"I was seventeen at that time," という答え方をすることにより、19 行目で形式上は表わされなかった結束性を後から回復するような形で LN の質問に答えている。まず、相手が過去時制を表す語句を産出していないにも拘わらず過去時制で応答している。さらに、"at that time" という、先行するやりとりの一部を指標する表現を用いることで、今問題になっているのが留学当時の年齢であるという理解が示されている。このような形で答えることによって、LN の発話の中で明示されていなかった先行するやりとりとのつながりが、発話の形式にはっきりと表わされているのである。

このことから、やりとりの流れを発話の形式の中に表わし、結束性を築こうとすることは、質問をしながらやりとりを主導しようとする話し手（この場合 LN）だけではなく、会話に参加する両者が目指し、共同で成し遂げようとしていることだということが分かる。つまり、質問者が用いた形式の中に表れていなくても、質問を産出するタイミングや質問の内容によって、その質問が新たな話題を持ち出す、先行するやりとりから独立した質問なのか、そうでないのかを相手が汲み取ってくれることも十分に可能だということになる。しかしながら、逆に言えば、本来であれば結束性（あるいは結束性がないということ）は、個々の発話の形式によって表わされるべきものである、という言語使用上の規範が働いていると解釈することもできる。

## 6. おわりに

意味ある発話の連なりを相手と共同で産出し、やりとりを開始、展開していくことは、日本人の英語コミュニケーション力を考える上で非常に重要な課題のひとつだと考えられる。本稿では、そのような行為が英語母語話者同士の会話ではどのような発話によってなされているのか、そして、日本人英語学習者の会話の場合はどうであるのか、話題提案質問、ニュース標識質問、話題展開質問に焦点をあて検討してきた。その結果、日本人母語話者の会話において、話題導入質問は問題なく産出されているのに対し、ニュース受けとめ／ニュース標識質問、話題展開質問については、会話のスムーズな進行、展開の妨げともなり得る、様々な課題があることが示唆された。

しかしながら、本稿で見てきたように、ニュース受けとめ／ニュース標識質問、話題展開質問として英語母語話者が使用している文法形式は、決して複雑なものではなく、話題提供質問を産出するだけの英語

力がある英語学習者であれば、簡単に使いこなすことができるはずのものである。したがって、どのような場面で、どのような表現を用いるかについての明示的、具体的な指導があれば、比較的簡単に習得することができる相互行為ストラテジーだと考えられる。であるとするならば、Schegloff 他 (2002) も提唱しているように、実際の会話データにもとづくダイアログを教材とした明示的な指導は有効に働くのではないか。とくに、高校生や大学生など、ある程度の文法知識があり、また、メタコミュニケーション的な説明を理解することができる学習者に対して、そのような指導を導入することは、検討に値することであるかもしれない。

最後に、今後の課題を2点挙げておく。本稿で検討したのは、大学院生という限定された協力者が参加した、小さな会話コーパスに基づくものだった。今後は、高校生、大学生など、より多様な学習者による会話データを収集し、異なる習熟レベルと相互行為能力との関わりも視座に入れて研究を行なう必要があるだろう。また、実際の会話データにもとづくダイアログを教材とした、明示的な指導を行ない、その有効性を実際に検討することが次のステップだと考えられる。

### 付録：文字化表記法

本稿で引用した会話データの事例は、ゲイル・ジェファソンによって開発された表記法によって文字化されている。データ内の語句は正書法のおづりではなく、話し手が実際にした発音、発声をできるだけ正確に再現するようにつづられている。用いた記号は以下の通りである。

(0.2)	沈黙の長さを示す秒数
=	発話の間、あるいは語句の間にまったく途切れ目がないことを指す
[	オーバーラップの開始
]	オーバーラップの終了
::	音の引きのばし
<u>word</u>	強勢
°word°	ボリュームを下げて発声された語句
h h h	呼気、あるいは呼気による笑い
.hh	吸気
wor-	声門閉鎖
.	下降イントネーション
,	継続を表すイントネーション
?	上昇イントネーション
?,	多少の上昇イントネーション
( )	不確かな聞き取り
(( ))	トランスクリイパーによる付加的な情報
{ }	個人情報保護のために表記されていない語句
<i>word</i>	個人情報保護のために置き換えられた語句

### 謝辞

本稿執筆に際して貴重なコメントをくださった黒嶋智美氏と査読者の方々、また、データ収録にご協力下さった方々に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1 Jefferson (1981)、Heritage (1984: 339-44, n. 13)、Maynard (2003: 100-103) は、「ニュース受けとめ (news receipt)」と「ニュース標識 (newsmark)」を、話題のさらなる展開を促す、その度合いによって区別している。前者は当該の話題についてのさらなるやりとりを促さないのに対して、後者は強く促すと言う。そして、事例 (1) の 9 行目、"Al did?" という問い返しは、その後のやりとりを促さない、前者に分類される形式 (平叙文の語順をとる部分的な繰り返し) をとっている。しかしながら、この事例では、この問い返しはさらなる質問と共に起しており、話し手 (Curl) がこの話題についてさらなるやりとりを展開させようとしていることは明らかである。次に見る事例 (2) の "do you really" という問い返しは、後の展開をより強く促す形式 (疑問文の語順をとる部分的繰り返し) をとっており、実際、やりとりはその後さらに展開している。

## 引用文献

- Barraja-Rohan, A.-M. (2011). Using conversation analysis in the second language classroom to teach interactional competence. *Language Teaching Research*, 15 (4), 479-507.
- Brown, P., & Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Couper-Kuhlen, E. (2012). Some truths and untruths about final intonation in conversational questions. In J. P. De Ruiter (Ed.), *Questions: Formal, functional and interactional perspectives* (pp. 123-145). Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hayano, K. (2012). Question design in conversation. In T. Stivers and J. Sidnell (Eds.), *Handbook of conversation analysis* (pp. 395-414). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action* (pp. 299-345). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J., & Atkinson, J. M. (1984). Introduction. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action* (pp. 1-16). Cambridge: Cambridge University Press.
- 細田由利. (2008). 『『第二言語で話す』ということ — カタカナ英語の使用をめぐって』社会言語科学 10 巻第 2 号, 146-157.
- Jefferson, G. (1981). *The abominable 'ne?': A working paper exploring the phenomenon of post-response pursuit of response*. Occasional Paper No.6, Department of Sociology, University of Manchester, Manchester, England.
- Kasper, G.(2006). Beyond repair: Conversation analysis as an approach to SLA. *AILA Review*, 19,83-99
- Koshik, I. (2005). *Beyond rhetorical questions: Assertive questions in everyday interaction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Koshik, I. (2010). Questions that convey information in teacher-student conferences. In A.F.F. S. Ehrlich (Ed.), *"Why do you ask?": The function of questions in institutional discourse* (pp. 159-186). Cambridge: Cambridge University Press.
- Maynard, D.W. (2003). *Bad news, good news: Conversational order in everyday talk and clinical settings*. Chicago: University of Chicago Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Schegloff, E.A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53, 361-382.
- Schegloff, E.A., Koshik, I., Jacoby, S. & Olsher, D. (2002). Conversation analysis and applied linguistics. *Annual Review of*

*Applied Linguistics*, 22, 3-31.

Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.

Steensig, J., & Drew, P. (2008). Introduction: Questioning and affiliation/disaffiliation in interaction, *Discourse Studies* 10 (1), 5-15.

Stivers, T. (2010). An overview of the question–response system in American English conversation. *Journal of Pragmatics*, 42, 2772–2781

Wong, J. and Waring, H. Z. (2010). *Conversation analysis and second language pedagogy: A guide for ESL/EFL teachers*. New York/ London: Routledge.